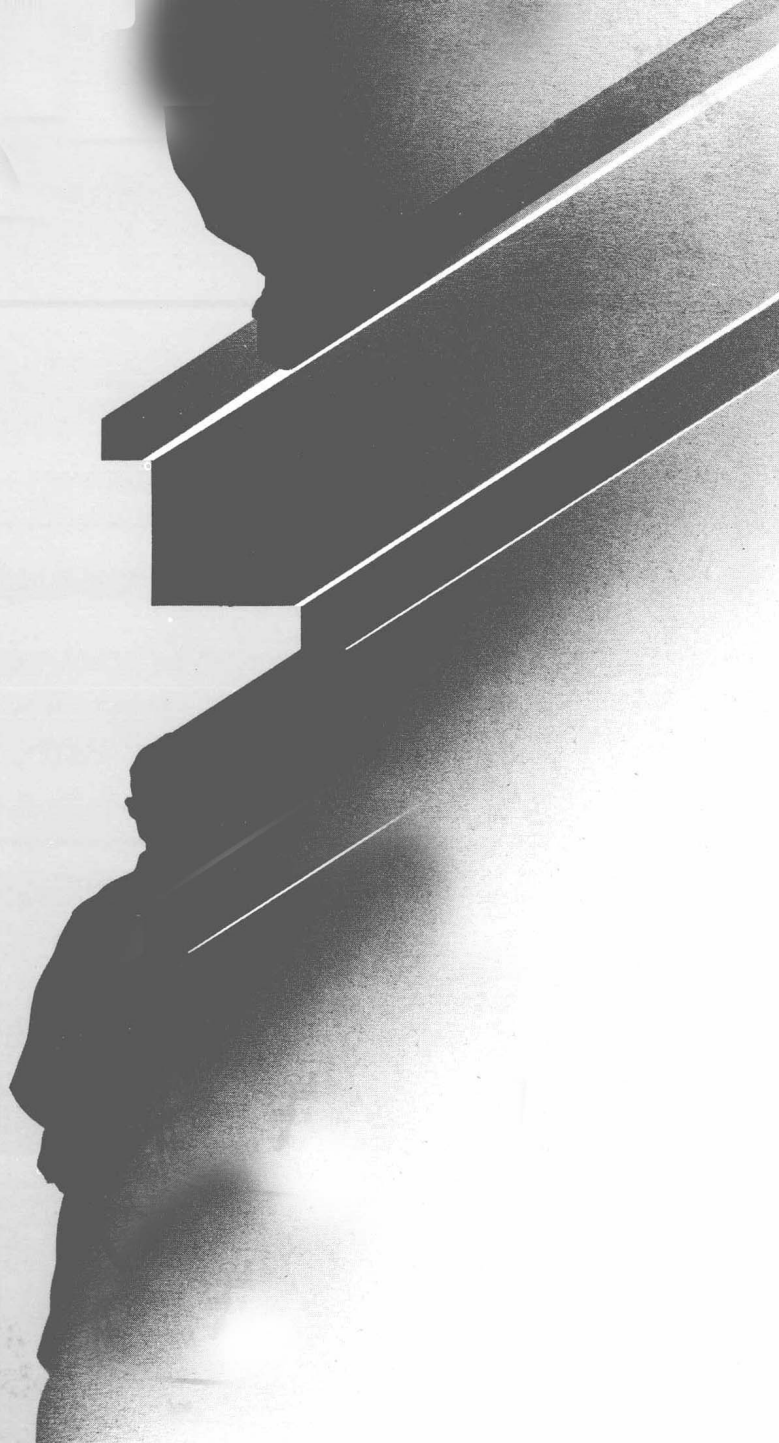


い王将

●

雄飛篇

斎藤栄



黒い王将

雄飛篇

一九七八年一〇月一〇日 初版印刷

一九七八年一〇月二五日 初版発行

定 価 七八〇円

著 者 斎藤 栄

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六
販売部 (〇三) 二三八一七七八

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目

次

第一章	飛鳥の賭	7
第二章	開城の賭	33
第三章	密室煙詰	59
第四章	右鬼殺し	85
第五章	娘の秘密	111
第六章	滝に祈る	137

第七章 人間将棋

164

第八章 異国の旅

191

装
丁
沢
田
弘

黒い王将

雄飛篇

第一章 飛鳥の賭

1

神代賢がフラリとその姿を飛鳥に現わしたのは、正月の五日で、未だどの家も門松や注連縄がとれず、新年を言祝ぐ気分^{ことば}に溢れていた。

東日本では、並ぶ者のない賭将棋師として、その道の強豪達に恐れられている神代だが、飛鳥に足を踏み入れるのは、これが初めてであった。

飛鳥へはタクシーを使い、雷丘で下車した。ここは、

万葉の歌人、柿本人麿が、

大君は 神にしませば 天雲の 雷の上にいほりせる

かも

と、詠んだ場所である。

北にある天香久山^{あまのかぐやま}の方角から、冷たい冬の風が吹きおろして来た。

飛鳥は、六世紀後半から約百年、日本の歴史上、蘇我氏が開発した場所だし、有名な聖徳太子もこの地に生まれている。

神代も、こうした歴史的な事実を多少は思い出しながら、空気の澄み渡った明日香村を歩き出した。

さいわいシーズンオフで、ほとんど観光客の姿も見当らない。今夜は、村はずれにある聖光寺という小さな寺に泊る。ここの住職の小野田善丈というのは、大の将棋好きで、約一週間ほど、庫裡に泊めてくれるという約束が、電話でできていた。

飛鳥宮跡から、酒船石を過ぎ、岡というところを左に折れて、談山神社への白く乾燥した山道へはいる。

気がつくと、道に片寄せした恰好で、一台のオープンカーがとまっていた。T社の国産品で、アローラインといわれる車体の流れるようなスタイルが目についた。

〈こんな歴史の村に不似合いな……〉

と、思いながら、神代が茶のレザーシートを覗き込むと、長身の男二人が唇^{くち}を寄せ合っている。

神代はハッとした。

〈ホモだろうか？〉

一瞬、わが目を疑った。片方は、縞の背広を着て、こ

ちらに背中を向けている。どう見ても姿形は男だ。一方、やや蒼ざめた顔の人物も、顎が角ばり、唇紅の色もない。

あるいは、どちらか一方が男装の麗人というのかもしれないが、さすがの神代にも、その見分けはつかなかった。

現代というのは、何事であれ、極端な恰好が多い。ヤケに女らしさを強調する者がいるかと思うと、無性な風俗を誇る者もいる。

へそれにしても、この寒いときに、オープンカーというのは、一体、どういう趣味だろう……

妙な違和感を覚えた。車のナンバーを見ると、〈品川〉の二字がついている。東京から正月早々、乗り込んで来たらしい。

変った奴等だ、とは思ったが、余計な口出しをしても始まらない。神代は、そのまま石舞台古墳の方へ向きを変えた。

石舞台は古代最大の権力者、蘇我馬子の墓といわれるが、現在では、古墳の盛り土がなくなつて、石組みばかりが露出してゐる。七十五トンもある大きな石が、三十九個も積みあげられてゐるのだ。

これだけの大土木工事は、大陸の技術によって初めて可能なわけだが、もともと、日本人には巨石崇拜の思想があつたに違いない。

「昔の日本人は、なかなか、大したことをするものだ」
神代はフト、この巨石の上で、月夜の晩に将棋を指したら、どんなに爽快だろうかと思つた。

冬の陽は早くも翳り、神代が欽明天皇陵のすぐ南にある小さな森の近くに來たときには、一層冷え込んだ北風が吹き始めていた。

一台のブルーの普通乗用車が、神代の姿を見かけたかと思うと、突然、エンジンをふかして、猛スピードで遠ざかつていった。

「なんだ、あの車は……」

神代は、呆つ氣にとられた感じがした。先刻のオープンカーにしても、今この乗用車にしても、どこことなく、この歴史の里に相応しくない。

車のとまっていたあたりまで行くと、道端に、道祖神の碑が一箇建つており、その左隣の地面が、何か上物を持ち去つたように、黒い土が露出している。

このあたりは、二面石、亀石などという古代の遺跡の

ほかに、猿石などでも有名になっている。ハッキリと断言はできないながら、どうやら、ブルーの乗用車の主は、ここにあった古い石仏を持ち去ったらしい。

慌てて逃走した感じが、何よりも雄弁に、彼等の後ろ暗さを物語っている。

〈ひどいことをする……〉

神代は、憤りに似た感情を持った。

生来の野人として、神代は、自然の物は、滅びるままに、自然の姿にしておくべきだと考えていた。

初めて来た飛鳥だが、もし、あの車が野の石仏を盗んでいるのだとしたら、とても許せないと思った。

以前、群馬のある富豪の邸へ招待されたとき、その庭に、小さきまざまな石仏、石像が並んでいた。いずれも苔蒸した時代物だが、それらは、みんな関西の野仏を蒐集したのだと聞いた。

〈よし。今度、みつけたら、捕えてやろう〉

神代は、柄にもなく、憤然としてそう考えた。

あたりが夕闇に包まれる頃、神代は、聖光寺に着いた。

小野田善丈は、年齢五十歳というが、色艶のいい顔色で、年齢より五つ六つは若く見えた。

「よういらつしゃった。こんな片田舎へ……。あなたの高名は全国に鳴り響いていますよ。本当に來られるかどうか、信じられなかつたくらいです」

善丈は、唐棧によく似た和服の着ながし姿で、神代を迎えてくれた。

「片田舎といわれるが、この飛鳥は、日本の都だったところじゃないですか。実は、私は初めてなので、ゆつくり見物したいと思って、一週間ほど泊めていただきたいと言ったのです……」

神代は言った。

「いやあ……。それは嬉しいけれど、とてもそう長くは……。せいぜい二泊三日もあれば、あらかた見終りますよ」

善丈は手を振った。

「そうですか」

「實際、ここは荒れ果ててしまっています。たとえこの聖光寺にしたところで、心ない観光客のために、庭や本堂を滅茶滅茶にされましてな。それでいて、拝観料もよう取れませんわ。……ま、よろしい。それよりわたしは有名な神代先生に、ひと揉みしてもらえればええので……」

神代は低く笑った。

「将棋の方はゆつくりと……。それより、このあたりに
は、石仏泥棒が流行っているんですか？ 実は、ここへ
来るまでの間に、一件目撃しましたよ」

「ホウ。ご覧になりましたか」

善丈の瞳が、意味ありげに光った。これまでの好々爺
ぶりが嘘のようだった。

「見ました。ここに泊めていただく間に、万一、また目
撃したら、今度こそ、逃しはしません」

当然のつもりで神代が言うと、それをどう受取ったの
か、善丈が厳しい表情でとめた。

「先生。それは放っておかれた方がよろしい……」

「なぜですか？」

神代は、むしろ驚きを籠めて訊き返した。

「なぜといって……。つい先日、うちの庫裡に泊った
東京の若い歴史学者の先生が、同じようなことをおっし
やって……。ところが夜更けてもお帰りがない。さん
ざ、お捜ししたところ、益田岩船のそばで、大怪我をし
ていらつしやった……」

「それは、石仏泥棒にやられたのですか？」

「さあ……。なんとも言えませんが。しかし、とにかく

く、その先生は頭を強く打って、記憶喪失症とやらにな
られたので、そのまま東京の病院へお帰りでした……」

どうやら、善丈は、言外に、神代の行為を制止しよう
という狙いらしかった。だが、神代は強い者に対して
は、刃向かわないでいられないという「反骨精神」があ
る。

「それは気の毒に……。多分、それは石仏泥棒を発見し
たために、逆襲されたんですよ。そのあたりに、野仏
の数は多いでしょう……」

「この辺は、野仏の宝庫ですよ」

「そういう悪党どもを、放っておいていいんですか。私
は日本の文化などには、まったくの門外漢ですが、人を
小莫迦にしたようなやり口には腹が立ちます。とにかく
、明日から見廻ってみましょう」

「おやおや……先生は、思いがけないご趣味がござい
すな」と、善丈は苦笑いした。「先生には、ゆつくりと
なん局も将棋を指していただけると思っております
たのに……」

「それとこれとは別問題ですよ」

なおも、神代は憤慨していた。彼は一局百万円単位の
勝負をし、もう充分な蓄財もある。だが、単なる賭将棋

指しとは違ふ氣骨があつた。それは、他人の不正を見過ごせないという燃えるような正義感だ。

神代には、十八歳で夭折した妹がいる。彼女はある商事会社勤めていたが、上司が通産省の役人に贈賄し、不正を働いていたことを知り、それを内部告発したのだ。その結果、妹は交通事故で死んだ。何者のものとも分らない車で、轢き逃げされたのだつた。

神代は、冷たくなつた妹の手を握つて泣いた。

へおれはおまえの氣持を引き繼いで生きるぞ。どんな不正でも、知つた以上、それを発いてやる……」

賭将棋は、いささかも不正ではない。いやむしろ不正では成り立たない嚴しい勝負なのだ。ここで心身を鍛えた神代は、これまでもコトあるごとに社会の不正と闘つてきた。

神代の表情を読んだ善丈は、急に面白い提案をした。

「先生。先生は石仏泥棒と対決なさるお氣持のようですね。わしはここにいらつしやる間、みっちり将棋を指していただきたいと思つていますよ。そこで……といつたらなんですが、一局だけの一本勝負で、わしと貞剣（賭将棋のこと）をしてみませんか……」

「と、おつしやるかと？」

神代は、善丈の真意を計りかねて訊き直した。

「つまり……ですな。わしが勝てば、先生は石仏泥棒のことは、一切、口も手も出さん。負けたらやむをえません。お好きになさつたらいい。こんなことを言うのも、少しでも先生に余計な苦勞をさせたくないでな」

善丈は窪んだ眼の奥で、じつと神代を見詰めた。

いささか奇妙な感じのする提案だつたが、賭将棋マニアの中には、いつも何か理由をつけては勝負をいどむ者がある。この善丈も、そうした種類の一人だろうと思ひ、神代は楽な氣持でその挑戦を受けた。

「よろしい。その一本勝負、早速ながら、お受けしましょう」

聖光寺に着いた神代は、休む間もなく、善丈の住む庫裡で、最初の賭将棋を始めることになつた。これは金銭が目あてではない。しかし、それだけに、神代には名譽のかかつた大一番であつた。

善丈は独身である。代々、この寺の住職は妻帯しないならわしだと、善丈は言つた。

二人は立派な碁盤を挟んで対峙した。駒は磨き込んだ黄楊の盛上駒であつた。
「……この駒は、都介野高原で採れた最上のものです

ぞ」

と、善丈が自慢した。

それは同時に、それだけ凝っている自分の棋力を示そうとしたものに違いない。

都介野高原は、天理市丹波市から布留川をさかのぼった場所であり、古代の關鷄国にあたる。ここには昔から、良質の黄楊が生え茂っているのだ。

また、将棋盤の材料である榿も、都介野高原の近く、吐山地区には天然記念物となった巨木がある。こうした点から考えると、日本将棋の発祥は、飛鳥文化の成立と深い関係があるらしい。

振り駒で、善丈の先手番が決まった。

■7六歩……と指して、善丈は、納所（召使の僧）が注れてくれた茶をうまそうに啜った。ついでのことだが、都介野高原は、良質の茶の産地としても有名である。

△3四歩……神代は平靜に駒をすすめた。が、次に善丈が指した手を見て、〈あ〉と内心で思った。

■7五歩……いわゆる石田流である。しかもこれは急戦策だ。この戦法を使う以上、何か含むところ、期するところがあるに相違ない。

△8四歩 ■7八飛 △6二銀 ■4八王……ここまでは、ほぼ定跡にある通りだ。

〈このまま変化すれば、おれの方が有利になるはずなのに……。待てよ。一体、何を考えているのか……。〉

神代は不審に思った。それが一種異様な威圧感となってくる。

下手に手を変えれば、それはこちらの負けである。

構わずに、△8五歩と、本に書いてあるような手順を運んだ。すると善丈は、ノータイムで、■7四歩 △同歩 ■2二角成 △同銀 ■5五角打……と、一定の定跡手順を運んで来た。

〈ホウ。これでおれをつぶそうというのか。甘くみられたものだ……。〉

あるいは、神代という男は、定跡知らずとみての攻撃なのか。

用心しながら、神代は△7三銀 ■7四飛 △6四角 ■7三飛成 △5五角 ■8二竜 △同角までの手順を、間違わずに指しきった。

すると、ここで善丈がじっと盤面を睨み、ひと呼吸ついた。

〈何かあるぞ！〉

神代は腰を据えて、相手の動きに注目した。普通だと、▲8三飛打□7二金▲8五飛成という具合に変化する。

善丈が咳払いした。定跡通りに指さないつもりなのであろう。フト、神代は、この善丈という僧侶の癖が、盤の向こう側で、ひと廻り大きくなったような気がした。
〈指せる男だ……〉

たかが田舎坊主の将棋好き、と考えていたのに、いざとなると、底知れない力を発揮し始めたのだ。

やがて、善丈は駒台の上から、飛車を手に持つと、指先に力を籠めて、ビシリと8四に打った。

〈そんな手があるのか……〉

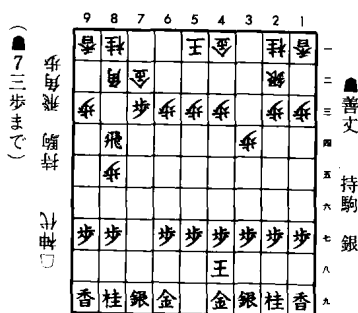
愕然とした。しかし、□7二金と守るより仕方がない。

すると、善丈は再び駒台に手を伸ばして、一步を持つと、勢いよく▲7三步と打った。

〈あっ〉

神代は敵の予期せぬ猛攻に、内心、思わず叫ばずにはいられなかった。

(図参照)



2

善丈が指した▲7三步打の手は、これまでどの定跡集にも書かれていない新手である。神代賢も、これまでなん度も石田流の急戦を受けているが、8四飛と打ちおろし、続いて7三步と畳みかける攻撃は初めてであった。

へやるな、この坊主……
なんととはなしに、神代は緊張した。

善丈の駒音は冴えていた。神代くらいになると、相手の指す駒音で、向こうがどれほど自信を持っているか見当がつくのである。

神代はこれを「耳眼」と称していた。将棋というのは、互いに無言で話す。それは真剣勝負と少しも変らない。敵の気迫を読み、内心の動きを察する方が常に相手をリードする。

剣術の場合は、そこにはほとんど物音が立たない。しかし、将棋では、びしりと音を立て、あるいはスーッと盤上をすべらせて駒が動く。これを見、そのときの音を聞くのだ。

すると、相手の自信、躊躇、不安が適確にこちらに伝わってくる。これが「耳眼」である。

即ち、耳で見るのだ。

今、神代は善丈の▲7三歩打ちに、必殺の気迫を感じた。

「危ない！」

この歩をどう処理しても、うまくないのだ。同金と取ると、8二飛成で角をとられる。同角では8一飛成で桂馬がタダになった上、王手がかかる。同桂では8三銀打と迫られると、このあとの変化で、飛車が金銀二枚と交

換した形になる。敵陣には、打ち込むスキがない。また、金がどこかに逃けているのでは、8三へ飛車が成られて悪い。

神代はじつと考えに沈んだ。

これまでの経験では、僧侶の指し手は、なかなか強腕の者が多い。どうしてかと思うに、彼等は長時間を座し、ひとつことを、じつと瞑想するのに慣れている。囲碁の方で、本因坊というのがあるように、僧侶はこうした室内遊戯に強い。

こんなときは、慌てずにじつと対策を練るしかなかった。

善丈との賭は、金銭がかかっていないが、逆に神代の名誉に関係する。初めての戦いで負けるようではどうにもならないと思った。

ちらつと上目づかいで善丈を見ると、すでに半眼を閉じ、「虚」の姿勢をとっている。これは神代が激しい闘志を燃やせば燃やすほど、柳に風と受け流す姿で、非常に勝負慣れた者がよく採用する手段だ。

そこには深い陥穽があるものだが、そこには深い陥穽があるものだ。

聖光寺はすでに夜だった。